



アーバン・アドバンス

2013.09 _No. **61**

[特集] 老いと向き合う都市

特集テーマ論文

在宅医療を含む地域包括ケアと都市政策 ● 辻 哲夫 後藤 純

エビデンスに基づく健幸都市政策のベクトル ● 久野 譜也 吉澤 裕世

多世代交流型CCRC アクティブシニアによる新たな地域活性化 ● 松田 智生

「遅い交通」とまちづくり 松山市花園町通りにおける取組み ● 吉谷 崇

名古屋発

郊外団地の元気再生にむけて 鳴子地区(名古屋市緑区)を事例に ● 井澤 知旦

名古屋市高齢者共同居住事業「ナゴヤ家ホーム」について ● 松田 徹

名古屋都市センター事業報告

まちづくりセミナー講演録「大都市に求められる魅力創造戦略」 ● 橋爪 紳也

「書を置き、まちへ出よう！」 まちづくりの「官と民」を考える ● 服部 敦

調査研究

[特集] 老いと向き合う都市

在宅医療を含む地域包括ケアと都市政策 東京大学高齢社会総合研究機構 特任教授 辻 哲夫 東京大学高齢社会総合研究機構 特任研究員 後藤 純	5
エビデンスに基づく健幸都市政策のベクトル 筑波大学大学院人間総合科学研究科 教授 久野 譜也 (株)つくばウエルネスリサーチ 吉澤 裕世	13
多世代交流型CCRC ～アクティブシニアによる新たな地域活性化～ 三菱総合研究所 プラチナ社会研究センター 主席研究員 松田 智生	19
「遅い交通」とまちづくり ―松山市花園町通りにおける取組み― 株式会社設計領域 代表取締役 吉谷 崇	27

名古屋発

郊外団地の元気再生にむけて ―鳴子地区（名古屋市緑区）を事例に― 名古屋学院大学経済学部 教授 井澤 知旦	39
名古屋市高齢者共同居住事業「ナゴヤ家ホーム」について 名古屋市住宅都市局住宅管理課 財産活用係長 松田 徹	47

名古屋都市センター事業報告

講演録	〈平成24年度 第2回まちづくりセミナー〉 大都市に求められる魅力創造戦略 大阪府立大学21世紀科学研究機構 特別教授 橋爪 紳也 大阪市立大学都市研究プラザ 特任教授 〈平成24年度 第3回まちづくりセミナー〉 書を置き、まちへ出よう！ ―まちづくりの「官と民」を考える― 基調講演 「官から学べ、そしてまちへ。わたしの政策遍歴」 地域活性化伝道師、中部大学工学部 教授 服部 敦 シンポジウム 「まちづくりの現場で考えること」 コーディネーター／地域活性化伝道師、中部大学工学部 教授 服部 敦 パネリスト ／豊川市建設部都市計画課 課長補佐 山本 英樹 富士河口湖町農林課 主査 渡辺 大介 (株)第一観光 代表取締役 樋口 藤人	57
調査研究	〈平成24年度 名古屋都市センター特別研究〉 名古屋市の総合交通戦略の導入評価 名古屋工業大学 特任准教授 金森 亮 〈平成24年度 都市センター研究報告〉 道路の利活用からみたエリアマネジメントの方向性について ～名古屋都心部に焦点をあてて～ 元 名古屋都市センター調査課 岩田 哲明 〈平成24年度 都市センター研究報告〉 名古屋市の道路構造の在り方について 元 名古屋都市センター調査課 大谷 将之 〈平成24年度 都市センター研究報告〉 都心における道路空間の再配分について ～本町通に焦点をあてて～ 元 名古屋都市センター調査課 四谷 晋司 〈平成24年度 NUIレポート〉 シンガポールの都市政策 vol.2 緑豊かなコンパクトシティ 名古屋都市センター アジアまちづくり研究会 〈平成24年度 NUIレポート〉 シンガポールの都市政策 vol.3 弱みを強みに変える水施策 名古屋都市センター アジアまちづくり研究会	72
		79
		84
		89
		94
		99

多世代交流型CCRC ～アクティブシニアによる新たな地域活性化～

三菱総合研究所 プラチナ社会研究センター 主席研究員 松田 智生

1. はじめに：

800万人の10万時間問題

高齢先進国日本。今後続々と団塊の世代が定年を迎えるが、その数は約800万人にもものぼる。子供の公園デビューが大事な儀式と言われるが、それと同様にシニアの地域社会デビューが今後重要になってくる。

定年後の自由時間は一体どれくらいあるだろうか。1日24時間のうち睡眠や食事以外を約14時間とすると、退職後の20年では、14時間×365日×20年間、何と約10万時間にもなる。充実した老後はこの10万時間の過ごし方にかかっている。

健康で充実した老後への思いは日本も海外も同じであるが、海外のアクティブシニアは、どのようなライフスタイルを送っているのだろうか。ここでは、米国で多数展開されているリタイアメント・コミュニティの事例から、活力ある超高齢社会へのヒントを紹介したい。

2. リタイアメント・コミュニティとは

米国では1960年代から勤労者が退職後の生活を満喫できるリタイアメント・コミュニティという街づくりが始まった。これは、住居、娯楽、医療、生活サービスが整備されたアクティブシニアのための街であり、主としてフロリダ、アリゾナ等の温暖な場所で開発されてきた。多くはゴルフ場に隣接しており、シニアの夢である「ゴルフ三昧」の老後が楽しめるようになっている。先駆けとして有名なのが、アリ

ゾナ州のサンシティで、開設後には約3千haの敷地に約3万人のシニアが住み、10のゴルフ場、ショッピングセンター、劇場、レストラン等あらゆる娯楽が満喫できるシニアの理想郷となった。

またフロリダにあるリタイアメント・コミュニティでは、ディズニーランド風の街並みで、居住者は自分の好みのオリジナルデザインの電動カートで移動する。居住者はゴルフ、料理、ヨガなど複数のクラブを掛け持ちするだけでなく、週20時間を上限とした軽就労プログラムも準備されており、ここで楽しむ「おこづかい」を稼ぐシニアも多数いる。

しかし、レクリエーション中心のリタイアメント・コミュニティにも幾つか課題が顕在化してきた。

第一の課題は「介護」。もし何かあった時にせっかく移り住んだ場所から別の介護施設に移転せざるを得なくなる「介護移転リスク」は、経済的にも精神的にも負担である。

第二の課題は「世代の偏り」。元来シニアだけの街づくりにしたのは若者の非行や喧噪をな



松田 智生

まつだ ともお

1966年生まれ 慶応義塾大学法学部政治学科卒業。
専門は超高齢社会の新産業・地域活性化。2010年三菱総研の政策提言プロジェクト「プラチナ社会研究会」を創設。産官学に多様な提言を行い、講演や寄稿を数多く実施。UR都市機構高齢者居住委員会委員。
文部科学省生涯学習フォーラム委員。
高知県移住促進協議会委員。



銀細工、折り紙、ラインダンスと多彩な今日のイベント 筆者撮影
くし、落ち着いた大人の街を目指したものであるが、若者がゼロで世代交流がないことは街の活気や多様性を損なうことになった。

第三の課題は「知的刺激の不在」。温暖な気候でのストレスフリーのゴルフ三昧の毎日では、頭を使わず衰えて認知症などを患うおそれがある。シニアには体の元気だけでなく頭の元気も必要なのである。「ゴルフ三昧の老後にご用心！」だ。

シニアにインタビューしてリタイア後に大切なものを聞くと、それは「きょうよう」と「きょういく」と言う。これは教養と教育ではなく、「今日用」があること「今日行く」所があることであり、毎日が日曜日の生活はすぐに飽きてしまう。

3. 第二世代のリタイアメント・コミュニティ～大学連携型CCRC

第一世代のリタイアメント・コミュニティの第一の課題である「介護」を解決したのが、同じ敷地で移転することなく健康時から介護時まで継続的にケアを受けられるCCRC (Continuing Care Retirement Community) というシステムだ。日本の高齢者住宅が、サービス付高齢者住宅、有料老人ホーム、特別養護老人ホームと分かれるように、米国でも高齢者住宅は、①健

常者用、②軽介護、③重介護、④認知症と分かれているが、CCRCはこの①～④の居室をひとつの敷地にまとめたものである。

CCRCは温暖な地域だけでなくフィラデルフィアなど冬はとても寒い地域も含め全米で約2千あり、立地も都市型、近郊型、リゾート型と多様である。CCRCの居住者は全米で約60万人、市場規模は約2.8兆円と大きな産業となっている。

ここでは健康支援のための運動、食事、予防医療、社会参加が精緻にプログラム化されており、「健康寿命を延ばす」ことが産業化されている。

第二と第三の課題の「世代の偏り」と「知的刺激の不在」を解決したのが、大学連携型だ。

マサチューセッツ州のラッセル・ビレッジは、大学の敷地にあり、入居条件は何と年間450時間以上の授業への出席である。シニアにとって授業は、昔は「出席しなければいけない」存在だったが、今は「出席したい」存在になっている。シニア学生同士が学び、サークル活動で遊び、再びキャンパスライフを満喫するという大学連携型CCRCは全米で約80も存在する。また別の大学ではシニアが学ぶだけでなく教える講座もあり、元投資銀行家や元エンジニアの話は学生にも好評だ。結局、学び・教えるなかで「何かに打ち込んでいる」「誰かの役に立っている」という実感が老化を防ぐのだ。

大学連携型CCRCは、シニアの知的刺激を満たし且つ介護移転リスクを払拭する第二世代のリタイアメント・コミュニティと言えよう。

	第一世代	第二世代
場所	温暖な地域	全国（温暖な場所に限定せず）
中核施設	ゴルフ場	大学・病院・介護・ゴルフ場
ライフスタイル	ゴルフ三昧、遊び中心	生涯学習・知的刺激・社会参加
住民	高齢者のみ	高齢者・学生・近隣住民

米国のリタイアメント・コミュニティ 第一世代と第二世代の比較

大 学 名	名 称	所 在 地
ラッセルカレッジ	ラッセル・ビレッジ	マサチューセッツ州
イサカカレッジ	イサカコミュニティ	ニューヨーク州
デューク大学	フォレスト・アット・デューク	ノースカロライナ州
スタンフォード大学	クラシック・レジデンス	カリフォルニア州
ダートマス大学	ケンダル・アット・ハノーバー	ニューハンプシャー州

米国の主な大学連携型リタイアメント・コミュニティ

4. 平均年齢84歳の大学連携型CCRC

筆者が過去2回訪問した大学連携型CCRCが、アイビーリーグの名門校、ダートマス大学の近隣にある「ケンダル・アット・ハノーバー」だ。美しい自然に囲まれた26万㎡の広大な敷地に約400人のシニアが暮らし、平均年齢は84歳。米国の平均寿命79歳を大きく上回り、寝たきりはわずか2割にしかすぎない。

注目すべき点は、「大学街にあるコミュニティ」という点だ。地元のハノーバー市は人口1万人のうち約半数がダートマス大学の関係者という学生街であり、コミュニティの近隣で大学生が颯爽と自転車を乗りこなす姿をみかけると気分が若々しくなる。



美しい自然に囲まれたコミュニティ 筆者撮影

5. ダートマス大学の生涯学習講座

このコミュニティの人気のひとつが近隣のダ

ートマス大学の生涯学習講座だ。ここでは「上手に歳をとる方法」といった日々の生活のテーマから、国際政治や世界金融のアカデミックなテーマまで約50講座があり、シニアの知的好奇心を満たしている。文学を学んだ生徒が次の国際政治の講座では教壇に立つことも珍しくない。講師陣は元大学教授や経営者、技術者など多士済々だが、ここでは講師はプロフェッサーやティーチャーと呼ばれずにグループリーダーと呼ばれる。これは、ディスカッションを中心とした双方向の学び合いの精神の現れと言えよう。

	分 野	講 座 名
1	政治	現代の国際政策課題
2	国際金融	国際金融システム
3	環境	温暖化問題を考える
4	生活	上手に歳をとる方法
5	歴史	古代のミステリーの謎解き
6	歴史	ウィンストン・チャーチル論
7	執筆	ノンフィクションの書き方
8	文化	生け花～日本のフラワーアレンジメント

ダートマス大学 生涯学習講座 2010年秋期講座から筆者作成



ディスカッションが中心の生涯学習講座 筆者撮影

6. 居住者のライフスタイル ～アクティブシニアは過去を語らず今を語る

ではコミュニティに住むアクティブシニアたちは、一体どんなライフスタイルを送っている

のだろうか。居住者へのインタビューの声を紹介したい。

○84歳・女性 元大学教授「誰かと一緒に食事が楽しみ。」

歳をとって一番さびしいのは一人きりの食事ね。ここでの一番の楽しみは誰かと一緒に食事をする事だわ。コミュニティの運営委員も務めているの。

○87歳・男性 元エンジニア「日曜大工に夢中。毎日忙しい」

退職前はエンジニアとして働いたけど今はヨガと日曜大工に夢中だね。コミュニティのプログラム委員会にも参加して、毎日忙しく過ごしているよ。

○84歳・女性 元公務員「良い病院が隣にある安心」

ここは、隣にダートマスの大学病院があるから安心だわ。高齢者にとって何かあった時に近くに良い病院があることはとても大事だわ。

○80歳・男性 元編集長「余生は母校の近くで」
私はダートマスのOBで、余生は母校の近くで過ごしたかったんだ。今はコミュニティ雑誌の編集長として頑張っているよ。

コミュニティには運営、財務、図書、ペット、スポーツ、ダイニング等の委員会があり、ほとんどの居住者が何らかの委員会に所属している。これは小・中学校時代の学級委員や図書委員や体育委員と同じであり、こうした委員会を通じて居住者は「施しを受ける」存在でなく「自らが担い手である」という気持ちになる。

また事業者にとっては、住民自治が進むと運営コストが低減できるメリットがある。

印象的だったのは、居住者が昔の話をほとん

ど話さないことだ。多くが元経営者や大学教授など、それなりの地位を築いた方で、ともすれば過去の自慢話になりがちだが、彼らは今夢中になっていることを実に楽しそうに話す。

アクティブシニアは、「過去を語らず、今を語る」のだ。



平均年齢84歳のアクティブシニアと筆者

□単身者	
6:00	起床
7:00	室内プールで水泳
8:00	朝食
9:00	エアロビクスのサークル活動
11:00	読書
12:00	昼食
15:00	生涯学習講座で歴史を勉強
17:00	手芸のサークル活動
18:00	夕食 サークル活動の仲間と
20:00	コミュニティの運営委員会
21:30	就寝

□夫婦	
7:00	起床
7:30	夫婦で散歩
8:00	朝食
9:00	ガーデニングのサークル活動
11:00	フィットネスクラブで運動
12:00	昼食
13:00	夫婦でゴルフ
16:00	生涯学習講座で美術を勉強
18:00	スタッフの子供の面会をみる
19:00	夕食 サークル活動の仲間と
22:00	就寝

毎日充実して忙しいアクティブシニアの一日 居住者ヒアリングから筆者作成

7. 居住者から選ばれる強みとは

今回訪問したケンダル・アット・ハノーバーは入居率98%、入居待ちが8年という大変人気の高い施設だが、その強みは一体何か。施設ディレクターのウルソー氏は「Our asset is our people」と語る。それは「こんな人と余生を暮らしたい」という雰囲気や価値観を持った居住者が魅力であり資産ということだ。

キーワード	概要
1. 居住者が資産	こんな人と暮らしたいという雰囲気や価値観を持った居住者
2. 自主性	居住者の自主性を重んじた自治活動
3. 生涯学習	ダートマス大学の生涯学習講座を通じた知的刺激やつながり
4. 愛校心	ダートマス大学の卒業生の愛校心
5. 街の魅力	学生街の活気。子供や孫を呼びたくなる街
6. 郷土愛	居住者の多くが東部ニューイングランド地方の出身
7. 良い病院	隣接するダートマス大学病院の安心感

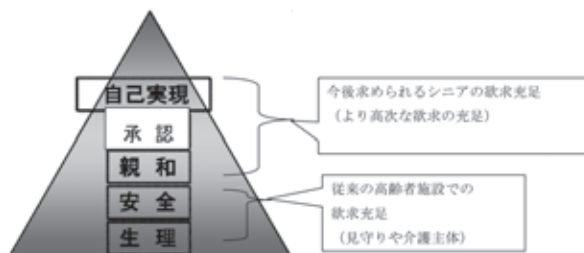
ケンダル・アット・ハノーバー、7つの強み 筆者作成

8. 日本への示唆

アクティブシニアが暮らすリタイアメント・コミュニティ。そして健常時から介護時まで継続的なケアを受けられるCCRC、さらに大学の近くで再びキャンパスライフを満喫する大学連携型CCRCなど、魅力的な市場が米国では大きく普及している。居住者は皆明るくアクティブに毎日を過ごし、日本の老人ホームのイメージとは大きく異なっているその姿は、日本の超高齢社会を考えるうえで多くの示唆がある。

(1) シニアの高次欲求の充足

マズローの欲求5段階説では、人間の欲求は①生理②安全③親和④承認⑤自己実現となる。従来の老人ホームのイメージは、生理や安全の基礎的欲求の充足が中心だが、リタイアメント・コミュニティでは、居住者同士の絆の親和欲求や、誰かから「ありがとう」や「おかげさまで」と言われる承認欲求といった高次欲求を

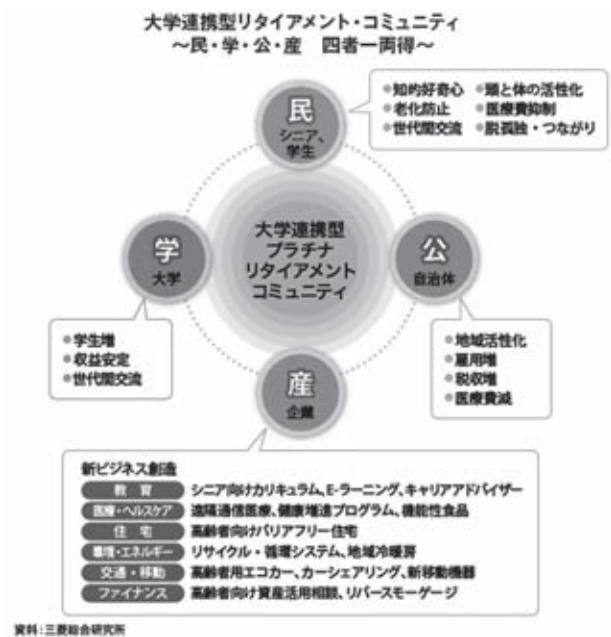


マズローの欲求5段階とCCRC 三菱総研作成

充足するシーンを作り出している。

(2) 四方一両得のモデル

大学連携型CCRCでは居住者、大学、自治体、企業それぞれにメリットがある。居住者は健康で知的な生活を楽しみ、学生はシニアの貴重な経験や知見を得られ、大学は多世代の知の拠点となる。自治体は、雇用創出や税収の増加、アクティブシニアによる消費の拡大、健康維持による医療費・介護費の抑制・低減など多面的なメリットがある。企業は、住宅・健康・学習・IT・金融の組合せ型のライフスタイル・ビジネスが創出され、民・学・公・産の四方一両得となる。

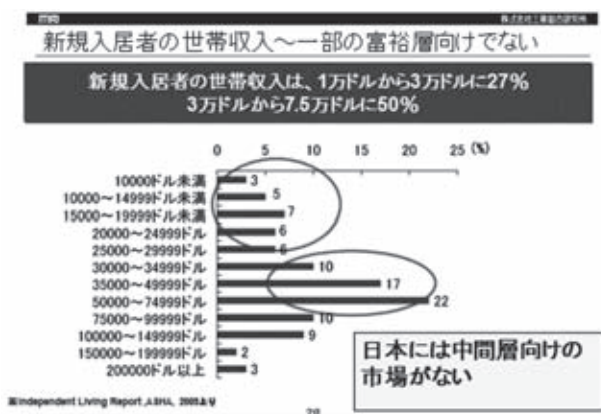


(3) 中間層向けの市場創出

今、日本のシニア住宅は、1億円近い入居金と毎月40～50万円を超えるような家賃の超高級物件の富裕層向けの市場か、あるいは狭いワンルームマンションで施しを受けるだけのような市場が中心であり、実は中間層、特にアップミドル層向けの市場がぽっかりと空いている。

富裕層向けと思われるCCRCだが、全米で約

2千あるCCRCの新規入居者の世帯収入をみると、1万ドルから3万ドルに約3割、3万ドルから7.5万ドルに約5割であり、一部の富裕層向けだけの市場ではないことが分かる。



新規入居者の世帯収入 Independent Living Report, ASHA 2009をもとに三菱総研作成

(4) 多世代の視点

高齢社会とは高齢者のためだけの社会ではない。若年層、子育て層、ミドル層を含めた多世代のための成熟した社会であり、そうした多世代が輝く社会を三菱総研では「プラチナ社会」と呼んでいる。ここで紹介した大学連携型CCRCはシニアのためだけではなく、学生とシニア双方にメリットがある多世代交流型のコミュニティである。

(5) 地域活性化の視点

日本では過去には工場誘致や企業誘致が地域活性化の目玉であったが、今後はアクティブシニアの誘致が、地域活性化の目玉になる。アクティブシニアが集い、地域の担い手になり生き生きと過ごすことで健康寿命が延びれば、消費も増える、将来の医療費や介護費も抑制できる。何より介護にさせないための健康支援や生涯学習、社会参加や軽就労、多世代交流の仕組みづくりが大きな産業と地域活性化のエンジンとなるのだ。

9. 日本での普及を阻む先入観の壁

ここまで紹介したようにリタイアメント・コミュニティやCCRCは魅力的であり有望な市場なことが分かるが、日本では以下のような先入観が大きな壁となっている。

先入観	実態
退職後の生活は今の自宅が最適。	理想的な住まいは、人生の過程で変化。CCRCは利便性、優れたケアがある。
今の自宅は送迎な生活、友人とのつながりを保つ。	自宅生活は次第に孤立化・孤独化に。CCRCは様々な人とのつながりがある。
自宅に住む方が経済的に安定。	総合的には、自宅は費用がかさみ、将来の予測困難。CCRCのコストは予測可能。
必要なケアは在宅で簡単に受けられる。	在宅介護は急な対応が難しく、多額の費用がかかることもある。
CCRCには病気で死も間近な老人ばかり。	従来の老人ホームと現在のCCRCは別。活発なライフスタイルを求め積極的に入居。

CCRCへの先入観と実態 "Five Myths and Realities of CCRC"等各種資料から三菱総研作成

一方で2012年に三菱総研が主催したCCRCの研究会には約60もの企業・大学・自治体・官庁が参加し、この分野への高い関心を実感した。研究会では従来のシニア住宅と日本型CCRCとの違いを以下のように示した。

	従来のシニア住宅型	日本型CCRC
コンセプト	住宅事業(ハード)	ライフスタイル事業(ソフト)
入居動機	不安だから(生理・安全欲求)	楽しみたいから(役割・承認欲求)
入居時の健康	具合が悪くなってから悪くなりそうだから 単身で	元気なうちに夫婦で
コミュニティ形成	住まうありき	集うありき こんな人と暮らしたいコミュニティ
サービスの概念	施し 上げ頼み頼み	住民の自立 住民主導の自治
コミュニティ開放性	クローズド型	街まるごとCCRC 共生型 地域社会とのつながり ブチ就労

従来のシニア住宅と日本型CCRCとの比較 三菱総研作成

10. 日本型CCRCの成立要件

米国モデルの受け売りでなく、日本の国民性や地域に合った日本型CCRCをどう創出するかが重要であり、以下その成立要件を述べたい。

(1) ユーザー視点のストーリー

多くの高齢者施設は、供給者・事業者視点で

語られることが多く、そこに住む人がどのように生き活きと暮らせるかユーザー視点で語られることは実は少ない。

得てして高齢者施設の紹介は、建物の外観、間取り、価格などのハード面が中心になりがちだ。あるいはソフト面でも「こうしたサービスを提供します」といった供給側の視点であり、居住者がいかにここでのライフスタイルを満喫しているかというユーザー視点でのストーリーが欠けている。

CCRCでは介護や見守りの安心感とともに、居住者同士の絆やつながりが生まれ、自治や軽就労や多世代交流を通じて誰かの役に立つ実感が得られ、自分の晩年に理想のライフスタイルが送れることをユーザー主語として語ることが重要だ。

(2) 閉ざされた施設でなく街まるごとCCRC

CCRCが普及しない先入観には、特権階級の高級施設や地域社会と断絶した迷惑施設のイメージがつきまとう。米国では塙に囲まれたコミュニティが多いが、日本では地域社会との共生は必須である。また施設単体での運営でなく、近隣のスポーツ施設、学校、文化施設、医療機関との連携を活かした「街まるごとCCRC」が日本型モデルと言えよう。

(3) 1%の視点

CCRCのような新しいライフスタイルを積極的に選ぶのは、1%、100人に一人と考えた方が良い。この1%はマーケティングの世界でいうイノベーター（革新者）やアーリー・アダプター（初期受容者）と言われる層だが、初めて海外旅行に行った人、初めて車を買った人、初めて携帯電話を使った人、初めてスマートフォンにした人と言われれば思い当たるだろう。

日本版CCRCの居住者は、後期高齢者でなく団塊の世代が有望だ。なぜならこの世代は初め

て核家族を経験し、初めて団地に住んだ世代であり、新たな住まい方・暮らし方を積極的に取り入れてきた世代だからだ。例えば子供なしの夫婦であれば誰かに老後を頼る志向もなく、海外赴任や転勤族は土地への執着がない。ここで初期需要の1%、団塊世代800万人の中の8万人を掘り起こし新市場を切り拓くのだ。

(4) 制度設計の視点

市場普及のためには、潤滑油となる制度設計も欠かせない。特に減税インセンティブが効果的である。米国では、居住者は家賃の一部をヘルスケアコストとして税控除可能であり、事業者も法人税の一部が減税されるインセンティブがある。補助金や手当を与えるのではなく、居住者や事業者に対する減税や規制緩和の制度設計が市場を拡大する。またヘルスケアREITのような金融面での支援も欠かせない。

おわりに：

否定語批評家の打破と一歩踏み出す勇気

リタイアメント・コミュニティや大学連携型CCRCは超高齢社会における有望ビジネスであることは間違いない。日本でコミュニティの崩壊が言われて久しいが、今ほど絆やつながり、そしてシニアの生きがい重視されている時はない。

確かにCCRCのような新しい住まい方や暮らし方には、先入観や規制など様々な阻む壁があるが、出来ない理由を幾ら並べても、現状の課題は何も解決しない。

「米国と日本では国民性が違う」、「日本では規制や制度が違う」、「当地では特殊な事情がある」と、日本では出来ない理由ばかり述べる「否定語批評家」が多すぎる。この「否定語批評家」に対しては、否定も結構だが必ず対案と代案を出すルールにすると発想は劇的に変わる。つま

り日本型モデルの建設的な意見をぶつけ合うのだ。

超高齢社会はピンチでなくチャンスである。

意志のある市民・企業・自治体・中央官庁・大学が連携した「一歩踏み出す勇気」、これが新たな地域活性化をもたらすのである。

（追記：謝辞）

2010年、2012年に訪問したケンダル・アット・ハノーバーのディレクター、ウルソー氏に感謝の気持ちを伝えたい。居住者へのインタビューや懇談会など、彼の機転の利いた行動とホスピタリティに大いに助けられた。

2011年の東日本大震災の後、彼からメールが届いた。「君がここで会った全ての人々が、日本と君を心配している」という文面であったが、遠く離れた米国のアクティブシニアとその事業者と心を通わせていることは、筆者のかけがえのない財産となっている。

以上